

甲状腺外科草子 66

清少納言の系譜：清原深養父

杉野 圭三

清少納言は日本文学史において高い評価を受け、小生が最も尊敬する才女の一人だが、経歴には不明な点が多い。



清少納言 深谷養父 清原家系譜

その家系は天武天皇まで遡る「清原氏」とされるが、確実なのは曾祖父とされる「清原深養父」までであろう。

清原深養父(きよはらのふかやぶ)：生没年未詳、10世紀前後)、延喜八年(908)、内匠允。延長元年(923)、内蔵大允。延長八年(930)、22年間中央の諸司づとめを行った、従五位下。勅撰歌人として活躍し、寛平御時中宮歌合・宇多院歌合などに出詠。中古歌仙三六人。古今集に十七首入集。勅撰入集四十二首。家集『深養父集』がある。 琴の名手と言われ、「後撰和歌集」に、「夏の夜、深養父が琴ひくを聞き」という詞書があり、藤原兼輔と紀貫之が歌を詠んでいる。

兼輔「短か夜の ふけゆくまに 高砂の峰の松風 吹くかとぞ思ふ」(短い夏の夜が更けゆくにつれ、趣深く響く琴の音を、まるで高砂の峰の松に吹く風の音かと聞いてしまう)

貫之「あしびきの 山下水は 行き通ひ 琴のねにきへ 流るべらなり」(山のふもとを流れる水が、琴の音にのり流れてくるみたいだ)

兼輔は琴の音を「峰の松風」、貫之は「山のふもとを流れる水」と表現している。

百人一首三十六に入ったのが次の歌である。
夏の夜はまだ宵ながら明けぬるを雲のいづこに月やどるらむ (古今集 166)

(夏の夜は宵のうちに明けたが、月は雲のどこに宿を借りているのだろうか?)

この歌には多くの類歌がある。

夏の夜は雲のいづくに宿るともわが面影に月は残さむ (秋篠月清集)。

また、傑作狂歌として有名なものがある。

夏の夜はまだよひながら明(あけ)ぬるを腹のいづこに酒やどるらん

その他にも素晴らしい歌を多く詠んでいる。

冬ながら空より花の散りくるは雲のあなたは春にやあるらむ (古今集 330) (冬のさなかに空から花が落ちて来るのは、雲のあなたにはもう春が来ているのだろうか)

光なき谷には春もよそなれば咲きてとく散る物思ひもなし (古今集 967) (光の射さない谷では春も無縁で、花が咲いてすぐ散る心配もない、時代の栄枯盛衰と無縁の感情)

冬ながら春のとなりの近ければ中垣よりぞ花は散りける (古今集 1021) (冬ながら春が近いので隣の中垣から雪が花のように舞い込む)

幾世へてのちか忘れむ散りぬべき野辺の秋萩みがく月夜を (後撰集三一七) (幾世代を経ても忘れないだろう、いずれは散る野辺の秋萩を美しく磨くように照らすこの月光を)

「恋」の歌はあまり得意そうではない。

恋ひ死なばたが名はたたじ世の中のつねなき物と言ひはなすとも (古今集) (私が恋い死したら、誰のせいだと評判が立つだろう、あなたが「人の世は無常なもの」と言っても)

深養父の住まいは京都・大原に近い小野の里にあり、「やぶ里(さと)」と呼ばれ、「源平盛衰記」によると、晩年には補陀落寺(ふだらくじ)を建てて住んだと言われる。

人を笑わせるのが好きだった逸話も残っているとのこと。四季の移り変わりや自然の調和を感じさせる格調高い歌を詠む人である。

参考資料：清少納言(岸上慎二)、新版百人一首(島津忠夫)、枕草子(島内裕子校訂・訳)、Wikipedia

(一甲状腺外科医の徒然なる随想)

2023年6月1日